艦魂年代史外伝 ～鬼の金剛と軍楽青年 破天荒なその出会い～

黒鉄大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
艦魂年代史外伝　～鬼の金剛と軍楽青年　破天荒なその出会い～

【Ｎコード】
Ｎ５４２９Ｆ

【作者名】
黒鉄大和

【あらすじ】
戦艦『金剛』。それは最も長い間日本を守り続けた老艦であり、最も戦中活躍した戦艦であった。その艦魂である金剛もまた、常に自分に厳しく他人に厳しくと日本海軍戦艦最古参の艦魂として誇り高く生きていた。そんな彼女に突如訪れたある夏の嵐。それは彼女の艦生を大きく変えるものであった。蝉しぐれ鳴り響くその夏、後の彼女の悩みの種となる日本海軍一の変態――滝川健太と運命的な出会いをした。今や伝説の迷コンビとなった二人の最初の物語。全てはここから始まった。金剛と滝川。二人の想いが交差する・・・

（前書き）

今回は金剛と滝川の初めての出会いの話です。
今や艦魂年代史史上伝説の迷コンビとなった金剛と滝川の物語は、
ここから始まったのです。
艦魂年代史外伝シリーズ第二弾！　ここに解禁ですッ！

能天気な奴は本当に人をイラつかせてくれる。ハッキリ言おう――目障りだ。

――あいつはいつもそうだ。

人の事をふざけた名で呼び、いつもこの私をイラつかせる。日本海軍現役戦艦最古参であるこの私が我を忘れて醜態（しゅうたい）を晒してしまう。まったくもってうざい奴だ。

――だが、なぜか奴に対しては恨みや憎しみはない。バカに憎しみを抱いていては人生台なしだが、それにしても――なぜか奴は憎めない。

それに――なぜか一緒にいると心の底が温かくなる。

まったくもって訳のわからん奴で、そんな奴と接している私も訳がわからなくなる。本当に、揃いも揃ってバカばかりで呆れてしまう。

これはそんな大バカな奴と、誇り高い大日本帝国に忠誠を誓う高貴なこの私の、宿命の出会いの話だ・・・

はぁ・・・

一九四〇年夏、蝉（せみ）がその命の雄叫びを必死で鳴らしている夏真っ盛りのある日、神奈川県横須賀湾の沖に停泊している戦艦『金剛（こんごう）』の一室では長い金髪に碧眼という外国美女が強気な瞳を尖らせて不機嫌そうに眉を吊り上げていた。

蝉の命の雄たけびを聞きながら、女は荒々しくため息する。

「まったくもってやかましい。短く儚いその命をなぜ有効に使おうとせんのだ。やかましく鳴いてその短き命を生殖に捧げるなど、愚か極まりない。それにこのやかましさは本当に頭にくる。ただでさえ暑くて気が滅入るというのに、下等生物など消えてしまえばいいのだ」

蝉の存在意義を全否定するこの美しい女性の名は金剛。この戦艦『金剛』の艦魂（かんこん）であり、現役戦艦最古参にして第三戦隊の艦魂司令官でもある。

艦魂とは文字通り艦の魂の化身である。戦姫などとも証される彼女達の存在は常人には見る事はできない。霊感の強い者、または艦魂の精神波長に似ている波長を持つ者、あるいは艦を愛する者など様々な憶測が飛び交っているが、現実として決定的な理由はいまだ不明だ。

彼女は二七年も生きているが、艦魂の見える人間とはまだ数人しか会っていない。それだけ艦魂が見えるという人間は稀有なのだ。

ちなみに二七歳というのは艦齢であって、艦魂である彼女は二三、四歳くらいに見える。艦魂は成長するのが基本的に遅く、最初に生を受けた際の外見年齢もバラバラ。例えば艦齢一歳なのに十八歳くらいに見える艦魂など、結構いい加減だったりする。

そして、この大日本帝国海軍の艦艇はもちろん一隻一隻に艦魂は宿っている。それどころか漁船一隻にさえ艦魂はいる。まぁ、この場合は正式には船魂（せんこん）というのに類別されるが、一般的に砕けた言い方として船魂（ふなだま）と呼ばれたりする。

ちなみになぜ金剛が大日本帝国海軍の戦艦なのに外人みたいな外見をしているかというと、戦艦『金剛』が日本がイギリスに注文して竣工した外国製の戦艦だからである。その為、外見がイギリス人なのだ。まぁ、日本の為に作られたというせいか日本人のような顔立ちはしているが。

当時の日本の造船技術はまだまだ低く、こうした先進国に注文して戦艦などの軍艦を輸入していたのだ。その後、そうした外国の技術を取り入れて日本製の軍艦などが量産。今では純国産の軍隊になっている。

日露戦争後しばらくまで補助艦は国産で主力艦は外国産というのが続いた結果、金剛が生まれた時は周りはイギリス人やアメリカ人、ドイツ人などが普通に存在した。あの日露戦争の英雄艦である戦艦

『三笠』もまたイギリス人だった。
今では主力艦も日本産なので黒髪黒瞳の日本人ばかり。すっかりその金髪や碧眼が目立ってしまうようになった。
この時代は日英同盟が解消されてイギリスは敵国と思われている頃、新入りの艦魂はそんな元イギリス人の金剛を最初は不思議に思うが、すぐにわかる――彼女が誰よりも日本という国を愛している事を。
現在金剛は最も軍人らしい軍人と呼ばれる艦魂で、規律に厳しく体罰至上主義。竹刀を持たせれば右に出る者はいないという桁違いの戦闘能力の持ち主。戦艦こそ史上最強の兵器だと自負する大艦巨砲主義者で、その恐ろしさから《鬼の金剛》と恐れ親しまれている。
現在日本艦魂のトップは連合艦隊旗艦、戦艦『長門』の艦魂であるが、金剛を地盤とした保守的な勢力が存在し現在日本艦魂は一枚岩ではない。
そんな人徳も権力、そして最凶の戦闘能力を有する金剛だったが、さすがに暑さというものには勝てずイライラが募っていた。汗を垂らしながら不機嫌そうに《大艦巨砲主義》と達筆で書かれた内輪を扇ぐ。ただし、どんなに暑くても帝国海軍の白い夏用士官服の詰襟を外したりはせず、ピシッとしている。歩く海軍法律とも称される彼女は決してだらしない格好はしないのだ。
「暑い・・・ッ！」
鬼の形相で歯ぎしりをしてイライラしていると、そんな蒸し暑い部屋に一人の少女が入って来た。黒髪を長いポニーテールで纏めた強気な黒瞳をした少女はイライラして仕事が捗っていない金剛を見て呆れる。
「んだよ姉貴。んなに暑いなら上着脱げよなぁ」
「やかましい。それより貴様は何だらしない格好をしてるんだ――榛名」
榛名と呼ばれた少女は金剛型戦艦三番艦、戦艦『榛名』の艦魂――金剛の妹である。

金剛型戦艦は全部で四隻存在するが、『金剛』以外の戦艦は『金剛』をモデルに日本で建造した為、同じ姉妹であっても彼女を始めとして他の姉妹も純粋な日本人なのだ。だが、例え国は違えど姉妹なので金剛は妹達から慕われている。

そんな金剛の妹である榛名だったが、その格好は姉の金剛のピシッとした格好に対してだらしない。暑さのあまり夏用の白い軍服の上着を抜いてワイシャツとズボンというラフなものだった。

榛名は額の汗を袖で拭い取ると暑そうに手に持つ内輪で顔を扇ぐ。

「いいだろ別によ。暑いんだからさぁ」

「いい訳ないだろうが。さっさと上着を着ろ」

「えぇー、だりぃー」

ぼりぼりと頭を掻いてめんどくさそうに言う榛名に、金剛のかなりもろい堪忍袋の緒が見事にブチぎれた。

「榛名ッ！　貴様という奴はあああぁぁぁぁッ！」

「あ、姉貴ッ！？」

金剛は椅子を倒して床を蹴って跳躍。艦魂の能力で空間から竹刀を発現すると重力と腕の力を駆使して全力で榛名に向かって振り下ろした。

「ギャアアアアアアアッ！」

榛名はとっさに後方に跳んだ。その刹那、

ドゴオオオオオォォォォォォンッ！　というすさまじい効果音が響き、床が陥没した。パラパラと振り落ちる埃の雨の中、陥没地点でゆらりと立ち上がる金狼に、腰を抜かした榛名がそのあまりの理不尽な暴力に怒鳴る。

「うおおおぉぉぉいッ！　姉貴！　何いきなり超絶殺人術を披露してんだよ！　もう少しで俺の頭が砕けるところだっただろうが！」

恐怖に身を震わせる榛名に対し、片足重心で竹刀を肩に乗せてギロリと睨む金剛。この恐ろしさから皆に鬼に金剛と呼ばれて恐れられているのだ。

「ふん、砕ければ良かったものを」

「うおぉいッ！　それが実の妹に向ける言葉かよッ！？」
ギャーギャーと榛名が怒鳴るが、クールな金剛は完全無視。榛名は悔しそうにウーッと唸るしかない。
「あ、姉貴はずるい・・・ッ！」
「まぁ、仕方ないわよ。姉さんがこういう性格だって事は今に始まった訳じゃないんだし」
「はわわッ！　何で床が陥没してるのぉッ！？」
そんなすっかり荒れた部屋の中に入って来たのは二人の女性。片方は大人びた柔らかい笑顔が特徴の長髪の美女。もう一方はその女性の後ろに隠れて怯えているショートヘアがかわいらしい少女。そんな二人の登場に榛名はため息する。
「何で同じ姉妹でこんなにもバラバラなんだよぉ」
「さあ？　今に始まった事じゃないでしょ？」
「わ、私は金剛姉さんや榛名姉さんみたいな暴力はちょっと・・・」
そんな三人のやり取りをじっと見詰める金剛は、ふぅと小さくため息をして腰に竹刀を挿すと腕を組んで仁王立ちする。
「それで、榛名に続いて一体何の用だ――比叡（ひえい）、霧島（きりしま）」
「あら？　用がなきゃ来ちゃいけないのかしら？」
クスクスと笑う大人びた女性の名は比叡。金剛型戦艦二番艦、戦艦『比叡』の艦魂にして金剛姉妹の次女だ。乱暴者の金剛と榛名の手綱を引く金剛姉妹のブレーキ役にしてその優しさから多くの艦魂に慕われている連合艦隊の古参組だ。
「あうあう・・・」
そんな比叡の後ろで涙目になっているのは金剛型戦艦四番艦、戦艦『霧島』の艦魂にして金剛姉妹四女である。金剛姉妹では末っ子で、泣き虫で人見知りが激しく内気でいつも比叡の後ろにくっ付いて行動する小動物系の女の子。年下の子に対しても敬語を使うほど気が弱い。ちなみに榛名とは双子なので髪型は違うが顔はそっくり。瞳が吊り上げっているか丸みを帯びているかの違いくらいなのだが、どういう訳か性格はまるで正反対になってしまっている。

日本戦艦の艦魂の中でも一際異色なのが、この金剛姉妹である。戦艦の異色姉妹として上げられるのはこの金剛姉妹と日露戦争で活躍した敷島（しきしま）姉妹くらいなものだ。

「冗談はやめろ。実際何の用だ？」

「もう、つれないわね姉さんは」

金剛は一切視線を動かさずに比叡を見詰め続ける。そんな姉に比叡は小さくため息するとにっこりとその柔和な顔つきに相応しい優しげな笑顔をする。

「今姉さんに軍楽隊が来てるんでしょ？　だから一緒に聴きに行こうと思って」

「音楽だけで軍人とか名乗ってる阿呆どもか」

「もう、そういう言い方しちゃメッだよ？」

「・・・比叡。貴様私の方が姉だという事を忘れておらんか？」

呆れる金剛に対し、比叡はニコニコと笑い続ける。その笑顔は本当に見ている者を和ませてくれるのだが、彼女は怒っていてもニコニコと笑っているので、彼女の笑顔は同時に恐怖の象徴でもあるが、今は前者の方だ。

「とにかく、久しぶりの軍楽隊の演奏を聴けるんだから、みんなで行きましょうよ。どうせ長門や陸奥（むつ）達も来るでしょうしね」

長門と陸奥とは長門型戦艦一番艦『長門』と二番艦『陸奥』の艦魂の事であり、現在最も新しく国民に親しまれている戦艦である。連合艦隊旗艦である長門は規律に厳しい金剛に対して温和な性格であり、その優しさから皆に慕われている。ただし、やる時はやる子であり後に締結される日独伊三国軍事同盟や対米英戦に反対し、二度の内乱を起こす事になる。

「まったく、貴様ら今日本が緊迫しているという自覚はあるのか」

今日本は緊迫した状況下にあった。一九三七年から始まった支那事変（日中戦争）は終結のめどが立たず泥沼化し、同盟国（日独伊三国防共協定）であるドイツは第二世界大戦真っ最中。ヨーロッパは戦場と化していた。ドイツは本年六月にパリを占領。中国軍を支

持していたフランスの陥落から日本は中国と連合国の繋がり（援蒋ルート）を断とうとフランス領であった北部仏印進駐を強行。アメリカや連合国側はこの日本軍の行動を正当ではないと非難し、元から悪かった日米関係は急速に悪化していた。

後に三国同盟締結や南部仏印進駐により日米関係は最悪の状態に陥るが、これはその前哨であった。

今の日本は、世界から孤立した状況に陥っていたのだ。

金剛の書類仕事にもそのような文面ばかりが書いてある。それほどまでに今の日本は非常事態に陥ってるのだ。だからこそ金剛は気を引き締めているのだが、

「軍人にも休息は必要よ。姉さんずっと仕事ばっかりで疲れてるみたいだし、たまには洋楽でも聴いて心を落ち着かせなさいって」

「私は別に疲れてなどおらん」

「はいはい。やせ我慢はなしね。姉さんに倒れられたら姉さんの仕事は霧島がやらなきゃいけないのよ？」

「え？　そ、そうなの？」

霧島は金剛の机の上にある分厚い書類の束を見て目を回した。

「おいおい、それは序列的に姉さんがやるんじゃねぇのか？」

「お姉ちゃん文字がいっぱいの文章って眠くなっちゃうの♪」

「貴様それでも誇り高い大日本帝国海軍の戦艦か？」

「うーん、どっちかって言うと能天気なみんなのお姉ちゃん、かな？」

どうやらまともに取り合うつもりはないらしい。鬼の金剛を手玉にできるのは現在は退役した先輩艦魂達か、この比叡だけである。比叡のこの抜け目のない言動には、さすがの金剛も勝てない。そもそも彼女は言い争いにはものすごく弱い。その為すぐ暴力に走るのだが、比叡は金剛の攻撃を完璧に避ける事ができるので無意味なのだ。ちなみにこの金剛と互角以上に渡り合える能力は、着実に長門に継承されていたりする。

金剛は諦めたようにため息すると渋々といった具合に苦笑いした。

「仕方ない。付き合おう」
「そうこなくっちゃね！」
ニコニコと笑う比叡と、すっかり戦意を失って小さく笑みを浮かべる金剛。そんな二人を見て榛名は小声で霧島につぶやく。
「さっすが姉さんだな。あの姉貴を手玉に取るなんてよ」
「そ、そうだね。でもこれでみんな一緒に音楽が聴けるね」
「おうよ。霧島は童謡がいいか？」
「むぅ、バカにしないでよぉッ」
「ははは、悪ぃ悪ぃ」
そんなやっぱり何だかんだあっても仲のいい二人に、比叡は嬉しそうに微笑むと、金剛と霧島の手をギュッと握る。驚くのは金剛だ。
「ひ、比叡一体何を・・・？」
「そうと決まったら早く行きましょう！　レッツゴーッ！」
「き、貴様敵性用語を使うなと何度言えば――ぬおぉッ！？」
「ね、姉さん引っ張らないでぇ～ッ！」
「おいおい、俺を置いて行くなよぉッ！」
結局、デコボコな金剛四姉妹は仲良く軍楽隊の演奏を聴きに行くのであった。一応金剛が長女なのだが、実質姉妹の中で一番統制力を有するのは次女の比叡だったりする。侮れない奴だ。
比叡に手を引かれて歩く金剛は不機嫌そうな顔をしているが、実は内心は満更でもなかったりするのは秘密だ。

その後、金剛達は『金剛』の甲板で軍楽隊の演奏を聴く事になった。
乗組員達は軍楽隊の到着を心待ちしていたので、乗組員達は終始笑顔で彼らを迎えた。
金剛は第二主砲塔の上に仁王立ちして軍楽隊達を見下ろす。その周りには比叡、榛名、霧島。さらに長門、陸奥、伊勢、日向、扶桑、山城という日本戦艦が勢揃いしていた。
「ちょっと金剛ぉ！　そんな詰まらない顔してないでほら笑顔笑顔

！」
「やかましい万年小春日和」
「ひっどーいッ！　でも許しちゃ～う」
「黙れ」
金剛にやたらと絡むのは長門。長い黒髪に端整な顔立ちをした現連合艦隊旗艦の艦魂。つまり日本艦魂のトップに君臨するリーダーなのだが、こんな具合で大丈夫なのかと不安な声があるのはこれを見る限り仕方のない事かもしれない。
ちなみに伊勢が扶桑に襲われ、山城が扶桑の頭を一升瓶で殴ったのはこの軍楽演奏の中の些細な事故であったりする。
そして人間や艦魂が大勢見守る中、軍楽隊達はすぐに前甲板に整列して演奏を始めた。力強い曲や感動できる曲など多種多様な演奏がされ、乗組員達は拍手喝采をした。それはもちろん艦魂達も同じで長門や日向などは歌い始める始末。扶桑と陸奥が拍手喝采を飛ばしていた。
そんな中金剛自身は不機嫌そうにそれを聴いていたが、その口元は楽しそうに微笑んでいた。なんやかんやで彼女も楽しんでいるのだ。
「ふ、ふん。なかなかいい演奏をするじゃないか」
「そうですね」
金剛の言葉に答えたのはセミロングの髪をした連合艦隊一の無表情無口少女――山城。この二人はなぜか意外にも仲が良かったりする。
数十分にも及ぶ軍楽隊の演奏は、拍手喝采のうちに終了した。誰もが皆笑顔で、楽しげなひと時であった事を示していた。
すでに比叡や長門達が帰った後も、金剛はたった一人で軍楽隊の後片付けを見ていた。
彼らも同じ帝国海軍の軍人。日本を守りたいという志(こころざし)は同じ。そんなの、彼女だってちゃんとわかっていた。
金剛はフッと小さな笑みを浮かべると、自室に帰ろうと踵(きびす)を返す。

その時、
「おおおぉぉぉいッ！　そこの金髪女ッ！」
一瞬、誰を呼んでいるのかわからなかったが、冷静に考えてまず軍艦に女は乗っていないのでこの時点で艦魂を呼び示している。そして、金髪という単語に、ようやく自分が呼ばれているのだと気づいた。
「何ぃ？」
驚いて振り向くと、甲板に立つ青年がこちらに手を振っていた。
まさか、と金剛は目の前の現実を疑った。この二、三年の間艦魂が見える者が自分に乗った事はなかった。だから、まだ信じられなかったのだが、それは真実に繋がる事になった。
「なぁッ！　何でお前『金剛』なんかに乗ってんだッ！？　説明プリーズ！」
好奇心丸出しの青年はキラキラした目で金剛を見詰める。そんな彼の手にはトランペットが握られていた。軍楽下士官らしい。
自分に向かって手を降る青年に、金剛は驚きながらも何やら嫌な予感がしていた。
「・・・何だ、この嫌な胸騒ぎは」
金剛はいまだかつてない自分に対する危機を感じていたが、それと同時に何か心地いいものが流れ込んでいた。これは一体・・・
金剛がじっと青年を見ると、青年はそんな彼女に向かってニッと不敵な笑みを浮かべた。
これが、後に伝説となる迷コンビ二人の、最初の出会いだった・・・

「なあ、お前どうして戦艦なんかに乗ってんだ？　どうして誰もお前に何も言わねぇんだ？　なあなあ」
青年は早歩きで歩く金剛の後ろにピッタリとくっ付いて矢継ぎ早に質問を浴びせる。
面倒な事にならないうちにすぐ逃げ出そうとした金剛だったが、

青年は驚異的な身体能力で金剛に追いつき、こうして金剛の後を追って質問責めにしていた。おかげで金剛はかな～り不機嫌だ。
金剛は不機嫌そうに眉を吊り上げイライラを募らせながらそんなうざい青年を無視してズカズカと進む。早くいなくなれ！と心の中で怒鳴りながら早足で進む金剛にそんな彼女の心境などお構いなしの青年はさらに質問攻撃を行う。
「おい人の話はちゃんと聞けよな」
「・・・」
「それで、お前名前は何て言うんだ？　っていうか何で軍艦の中にいるんだ？」
「・・・」
「なあなあ、何でお前の髪は金髪――」
「黙れッ！」
再び金剛のもろ過ぎる堪忍袋の緒がブチぎれ、金剛は腰から竹刀を引き抜くと青年に向けて躊躇（ちゅうちょ）なく、容赦なく振り上げる。驚くのはもちろん青年の方だ。
「ちょっ――」
真正面から無防備な青年に、金剛は全力を込めて竹刀を叩き込んだ。すさまじい轟音と同時に言葉では言い表せないような断末魔の悲鳴が木霊（こだま）した。
ゴオオオォォォ・・・と土煙が晴れると、青年は頭部に強力な竹刀の一撃が直撃し、そのあまりの激痛に床に倒れて悶絶していた。よく竹刀が折れなかったと驚いてしまうほどのすさまじい一撃だ。艦魂が生み出した物では怪我はしないにしても、死んだ方がいいのではないかというくらいの激痛は発生するので、悶絶する彼の痛みが壮絶なものであろうと想像できる。
そんなもがき苦しむ彼に金剛はあまりにも冷た過ぎる眼差しを向ける。碧眼の蒼は温かな空の蒼ではなく、氷の結晶のような冷たい蒼であった。
「やかましいッ！　貴様それでも軍人かッ！？　少しは黙っておれ

ッ！」
金剛は忌々（いまいま）しげにそう叫んで竹刀を腰に戻すと踵を返して今度こそ青年と離れようとする。
「いてて、いきなり攻撃は勘弁してくれよぉ」
「何ッ！？」
その有り得ない声に驚愕し慌てて振り向くと、そこには頭を押さえた青年が平然と立っていた。金剛はその光景に我が目を疑う。
「そ、そんなバカな・・・ッ！　一時間は床と抱き合えるくらいの一撃を加えたはずなのに・・・ッ！」
「床とそんなに愛を深めたい訳じゃないしな」
青年はさらりと返す。一体その余裕はどこから来るのであろうか。青年の余裕な態度に金剛はギリリと歯軋りをして怒鳴る。
「き、貴様一体何者だッ！」
この青年の尋常じゃない生命力にただ者ではないと悟った金剛は一度距離を取って再び竹刀を構える。そんな金剛の対応に青年は呆れた表情をする。
「何者って・・・ただの軍楽隊員だけど」
「軍楽隊の小童（こわっぱ）どもがそんなゴキブリみたいな生命力を持つかッ！」
「・・・お前、結構ひどいなぁ」
青年は恨みがましげに金剛を睨むが、金剛は警戒心バリバリで青年を睨み付ける。すでに彼女の胸の中では警鐘がやかましく鳴り響いていた。長年の勘が、彼がただ者ではないと知らせている。気を抜いたら・・・やられる。
碧眼を鋭くさせ、竹刀の先端はいつでも奴の急所を直撃できるように構える。そんな金剛の態度に青年は呆れたようにわざとらしく大きなため息をする。
「おいおい、そんな殺人者みたいな鋭い瞳で見るんじゃねぇよ」
「やかましいッ！　そんな事どうでもいいッ！　貴様の官姓名を名乗れ！」
「普通名前を聞く時は自分から名のらねぇか？」

「私は貴様より上官だッ！」
「上官って・・・軍人じゃあるまいし・・・」
ぶつぶつと文句を言う青年だったが、依然として睨み続ける金剛にしばらくすると諦めたようにため息しながら名乗った。
「俺の名は滝川健太上等軍楽兵曹。軍楽隊員でトランペット奏者だ」
青年――滝川は律儀にも名乗った。それを聞いた金剛はバッサリと、
「ふん。笛吹きか」
金剛は鼻を鳴らして一蹴する。そんな彼女の言葉に滝川はむっとする。トランペットはそんな簡単なものではないし、何よりそんな風に思われたくもない。
「笛吹きとはひどい言われようだな」
「笛吹き以外に呼び方があるか？」
「だぁかぁらッ！　トランペット奏者だって言ってんだろうがッ！」
「やかましい。結局は笛吹きだろうが」
「それを言っちゃぁおしまいよ」
滝川はため息して金剛を恨みがましげに睨み付ける。だがそんな視線を気にするほど金剛は繊細な性格ではない。彼女の神経のバイタルパートの堅牢さは連合艦隊でも一、二を争う。
「ふん。貴様に名乗らせて私が名乗らん訳にはいかんな」
性格は破壊的であっても、古き良き伝統を受け継ぐ真の海軍軍人である金剛は礼儀を何よりも重要視している。だから名乗られたら例えどんな相手にも自らも名乗る。それが彼女のポリシーであった。
金剛は竹刀の先端を床に付け、柄頭に両手を乗せながら仁王立ちする。その表情は自信に満ち溢れていた。
艦内だというのに、どこからか風が吹いた。柔らかく靡く金色の長髪が、彼女の美しさを際立たせる。蒼き碧眼が、煌く。
これが、鬼の金剛とも呼ばれる戦艦『金剛』の艦魂の姿であった。
「私の名は金剛。この戦艦『金剛』の艦魂だ」
「・・・え？」

長い沈黙が起きた。
全てがここから始まる。そんな事を思わせるくらいの沈黙。周りに他に人はおらず、自然と無音の世界となる。
互いの瞳が、お互いを捉えていた。
金剛は自信満々な表情で滝川を見詰める。今までにも十数人の艦魂が見える者に会って来たが、艦魂がわからなくても自分が放つ誇り高きオーラに気圧されて皆態度を正しくしたものだ。いくらこの滝川という人間がバカ者であっても、この威圧には敵うまい。そう確信していた。
だが、当の滝川は「んー」と少し腕を組んで考え、「はぁ・・・」とため息して頭を抱え、「そうか・・・」とつぶやくと、何か哀れむような視線を彼女に向ける。なぜそんな瞳をされなければならないのか。金剛は瞳を鋭くさせる。
「な、何だその目は・・・？」
不機嫌そうに滝川を睨み付ける金剛。そんな金剛を見詰めながら滝川はポケットからハンカチを取り出していつの間にか熱くなった目頭を押さえる。
「かわいそうに、頭をどこかで強打したせいでアホに――ごがッ！」
「貴様は一体何を勘違いしておるのだ！」
せっかくわざわざ名乗ってやったというのに、思いっ切りアホにされた事に金剛は怒鳴る。その怒りは竹刀に注がれて滝川の頭部を強打した。再び悶絶する滝川。哀れだ。
前言撤回！　こいつばバカ者ではない！　どうしようもない大バカ者だぁッ！
「バカヤローッ！　そう何度も頭を竹刀でぶっ叩くなボケッ！　俺の人格を司る大事な何かが壊れるだろうが！」
「むしろその何かが壊れれば良かっただろうがッ！」
金剛は顔を真っ赤にして激怒する。何か誤解で同情されたのがものすごくムカついたのだ。
一方、金剛の反応から彼女が頭を強打しておかしくなったのでは

ないと理解すると、今度は不気味なものを見るような目で金剛を見詰めながら少し後退する。そんな彼の態度に金剛は不機嫌そうに睨む。
「おいおい、もしかしてお前電波キャラって訳か？」
「うん？　で、電波キャラとは何だ？」
「訳のわからない事を言う妄想癖のある人を指す言葉だ」
瞬速の一撃。金剛の竹刀が再び滝川の頭蓋骨を破壊するかの勢いで炸裂した。
「ぬおおおおおぉぉぉぉぉぉッ！　天国がああぁぁぁぁッ！　天国が見えるうううううぅぅぅぅぅッ！」
「そのまま逝けッ！　バカ者ッ！」
天国が見えてしまうほどの激痛に悶絶する滝川に金剛が怒鳴り散らす。追撃として転げ回る滝川に向かって竹刀や蹴りを連発する。ここまで荒々しく暴行を加えるのも久しぶりだ。
すっかり肩を激しく上下させないと呼吸できないほどまでに疲れ、慌てて自分の愚行に気づいて金剛は姿勢を正す。
「い、いかん。危うく連合艦隊戦艦最古参のこの私の偉大な威厳が滅亡するところだった」
「んなもんお前には最初っからねぇと思うけど」
「死ねぇッ！」
金剛は怒鳴りながら再び竹刀を滝川に叩き込んだ。滝川はもう何発目かわからぬ理不尽な殺人級の暴力についに激怒した。例え温厚な人物であっても、いくらなんでもこれだけ一方的な暴力を受けていれば激昂するのは当然だ。そして滝川はそんな温厚な人物ではなかった。
滝川は痛さのあまり滲(にじ)み出た涙をゴシゴシと袖で拭い取ると自分を睨み付けている金髪碧眼の暴力女に怒鳴る。
「おい金髪ヤローッ！　テメェさっきから俺の頭を夏のビーチに輝くスイカの如くぶった叩きやがってッ！　いい加減にしろゴラぁッ！　せめてビキニを着ろよッ！」

「はあッ！？　何言ってんだ貴様ッ！　今私の名を愚弄しただろ！　っていうか貴様最後何言ってるんだ！」
「うるせぇッ！　金髪頭だから金髪ヤローだろうがッ！　その輝く金色を夏のビーチでビキニと共にを輝かそうと思わんのか愚か者ッ！」
「愚か者とは何だッ！　誰がそのようなふしだらな事など思うものかッ！」
「アホかテメェッ！　金髪には緑色のビキニが映えるだろうがッ！　そんな事もわからないなんてテメェ生きてる価値ねぇぞッ！」
「知るかッ！　それに私はそのような羞恥の為に生きてるのではないッ！」
「ここで注文する！　メガネをかけろッ！　特に黒ぶちメガネを希望ッ！　メガネっ子は世界を救うッ！　かわいくさせるタイプや知的に見せるタイプなど様々だが、テメェは知的な細メガネだ！　これで貴様も少しはまともな女になるッ！　今すぐ黒ぶちの細メガネを掛けるアホがッ！」
「意味のわからぬ事をぬかすなッ！」
滝川の意味不明発言の連発に鬼の金剛と多くの艦魂達に畏敬されてきた金剛に変化が起き始めた――というかむしろ壊れ始めた。
いつもの彼女らしくなく怒鳴って来る滝川に向かって自らも声を荒らげる。こうも真っ向から自分に対峙できるのは長門以来であった――もちろん、こんなアホな論議ではなかったが。
滝川は自分の意見を完全否定する金剛に激昂する。
「バカヤローッ！　ビキニが嫌だと言うのか！？　だったらお前は萌えコスプレの奥義――ネコミミ＋メガネ（黒ぶち）＋スクール水着＋セーラ服（上だけ）にルーズソックスを着用しろ！」
「もはや人間の着る物じゃなくなってるぞ！」
「何だと！？　貴様謝れ！　全国で生きる秋葉系の人達全員に謝れッ！」
「誰が謝るかッ！」

「もちろんスク水は旧スクだッ！」
「やかましいッ！　そんな専門用語を持ち出されてもわからんッ！」
「あああぁぁぁもうッ！　テメェは男のロマンがわかってねぇッ！　旧スクとブルマは男の女に着せたい夢の服だぞッ！」
「知るかあああぁぁぁッ！」
金剛は竹刀を振り回して激昂する。その顔は常の彼女ではありえないくらい真っ赤に染まっていた。
滝川はめちゃくちゃな軌道で振り回される竹刀を巧みに避けながら世界の摂理を理解しようとしない愚か者に向かって怒鳴る。
「えええぇぇぇいッ！　お前はわがままな奴だなッ！　それじゃあせめてメガネだけは着用しろ！　ここまでレベルを下げてもらえるなんてありがたいと思えッ！」
「意味わからんしメガネなど不要だッ！　私の視力は二・〇ある！」
「バカヤローッ！　ならここ（神奈川県横須賀軍港）から呉（広島県呉軍港）に停泊している軍艦の数を数えてみろッ！」
「物理的に不可能だろうがッ！」
「あっはは、この程度が見えなくて何がメガネは必要ないだ。バカかお前はッ！？　今すぐにでもメガネを装備しろッ！　愚か者めッ！」
「誰がするかッ！」
「この金髪がッ！　メガネは正義なんだ！　メガネっ子は世界を救うんだぞッ！」
「救うかあああぁぁぁッ！」
ギャーギャー言い合うまるで全く違うタイプの二人は、いつの間にか絶妙に息の合ったボケツッコミを繰り出していた。
夏の蝉達の命の雄叫びを圧倒する二人の言い合いはその後一時間、お互いに肩を激しく上下させるほど疲れるまで続いた。
これが、後に伝説の迷コンビとなる金剛と滝川の最初の出会いだった・・・

「なぁ、本当にメガネをする気はないのか？」
「くどいッ！　しないと言ったらしないッ！　というかここは私の部屋だぞッ！　早く出て行けッ！」
　滝川は金剛の自室まで追いかけて来ていた。先程の威勢はどこへやら、今ではもう胸の前で手を合わせて懇願（こんがん）するまで弱々しくなっている。
「なぁ、頼むよ。俺はメガネをかけた女の子が大好きなんだからさ」
「貴様の女の趣味を聞いても迷惑なだけだ」
　金剛はゴキブリでも見ているような冷たい視線を滝川に向ける。しばしそんなやり取りが続いていたが、ついに滝川は根負けしたようにため息をしながら諦めた。すると、何かを思い出したように、金剛を見る。
「なぁ、そもそもお前って一体何なんだ？」
　滝川のアホ丸出しの問いに対して金剛は見事にすっ転んだ。
「大丈夫か？」
　肩を小刻みに震わせながらゆっくりと立ち上がる金剛に、滝川はとりあえず心配するが、それは杞憂であった。
　金剛は怒りを顔を染めると竹刀でバシッと床を激しく叩いた。アホアホだと思っていたが、まさかここまでアホだったとは。さすがの金剛も怒りと共に呆れが生まれる。
「貴様ぁッ！　今の今までそんな事もわからずにああも私に意味不明な妄言を吐いていたと言うのかッ！？」
「妄言とは失礼な。夢言と言ってほしい」
　あっけらかんと返す滝川に、金剛はすさまじい脱力感を感じて額を押さえた。
「どっちも同じな気がするが」
「まぁそれは置いといて、お前は一体何なんだ？」
　滝川は興味津々な目で金剛を見る。まるで珍しいおもちゃを見詰める小さな子供のように、その瞳は今までの彼の言論や行動に反して純粋なものだった。鬼の金剛も、こういう視線は苦手だった。

「はぁ、また一から説明せなければならんのか」
金剛はため息して説明を始めた。自分は艦魂と言ってこの戦艦『金剛』の魂の具現化の存在だと。艦魂はどんな艦にも宿り、その姿は常人には見えないと。
艦魂についての一通り説明すると、滝川は納得したようにうなずく。
「そうだったのか、知らなかったな。俺は今回が初舞台だったからな」
「そうなのか？」
「あぁ。軍艦に派遣されたのは初めてだな。今までは大体陸上基地の慰安訪問ばっかりだtったしな」
「そうか」
金剛は納得した。初めて艦に乗ったなら自分達の存在を知らないのは当然だ。誰かから聞かない限りその存在は外部には漏れないからだ。まぁ、艦魂が見える人間など本当に稀有な存在だ。自分が見える人間と出会えるなど、艦魂から見ても珍しい事。大概の艦魂は自分が見える人間などとは会えずに生涯を閉じている。
長年日本の守り神として生きてきた金剛も、彼を含めて自分が見える人間とは数人しか会った事がない。それほど珍しい存在なのだ。
久しぶりに出会えた自分が見える人間がこんな破天荒な奴だと思うと、感動もくそもなかった。ただただ疲れてため息が出てしまう。
すると、そんな金剛を無視してずっと何か考え込んでいた滝川。その真剣な凛々しい表情に金剛は不覚にもドキリとしてしまう。
（な、何を考えておるのだ私は・・・ッ！）
自分で自分を竹刀でぶっ叩きたかったが、彼の目の前でそんな事をすればまた哀れみの目で見られるのは目に見えているので我慢した。
しばし何か考え込んでいた滝川はふと金剛を見る。その表情は真剣そのもの、自然と金剛の表情も厳しくなる・・・ちょっと頬が赤いのは秘密だ。

「金髪。ちょっと重要な質問があるんだが、いいか？」
「構わない。何だ？」
不気味な沈黙の後、彼は言った。
「メガネをつけた艦魂っているのか？」
金剛の容赦ない神速の一撃が滝川の頭部に炸裂した。
「いてぇよッ！　何しやがんだッ！」
「貴様は本当にメガネしか興味ないんだなッ！？」
「うるせぇッ！　別にいいだろうが！」
アホ全開の滝川に、金剛は奇襲だったとはいえこんな奴にドキリとした自分を呪った。いくら自分が女子（おなご）だとはいえこんな男にそのような想いを感じるなど言語道断だ――まぁ、性格はどうあれ顔は結構いいのだが。むしろかなりかっこいい。
金剛が自分の失態に頭を抱えていると、滝川は再び真剣な眼差しで質問を再開する。凛々しい顔なのだが、その質問内容があれなので威力は半減以下だ。
「それでさ、いるのか？　メガネっ子の艦魂って」
キラキラした瞳で問う滝川に、金剛はもう呆れるしかない。
「まぁ、いるにはいるぞ」
「ほ、本当かッ！？　誰だよッ！？」
「・・・確か潜水母艦『剣崎（つるぎざき）』（後の軽空母『祥鳳（しょうほう）』がメガネを掛けていたな」
「うおおおおぉぉぉぉぉッ！　俺今度『剣崎』に行くッ！　絶対に行くッ！　神に誓ってッ！」
「何を神に誓っておるのだ。勝手にしろアホ」
金剛は目の前でアホ過ぎる決心をしている滝川を見て頭を抱えた。
彼女の長年の艦生の中でもこれほどまでにバカな奴は会った事がなかった。というかもはやバカとかそういうレベルではない。しかも自分自身もそんな彼の壊滅的なバカぶりに振り回されてしまった。これは一生の不覚である。
だが、不思議と嫌悪感はなかった。傍にいてもあまり嫌ではない。

と言ってもいてほしいとも思わない。微妙なものだ。ハッキリ言えるのはウザイ。
「まったく・・・貴様――」
「滝川だ。名のっただろうが」
「貴様も私を金髪と呼んでいるだろうが」
「あれはニックネームだ」
「・・・嫌なニックネームだ」
金剛はため息して滝川を見る。ここで初めて金剛は彼をちゃんと見た気がした。だからこそ、改めて見て彼の顔立ちの良さなどが目立ってしまう。黙っていればいい男。それが滝川健太という男だった。
何年ぶりかに会ったのがこんな奴だと思うと気が滅入る――だが、今までに会った事のないタイプの滝川に、どこか引かれる自分がいる事を、まだ彼女は知らない。
「滝川。貴様はいつまでこの艦に乗っているんだ？」
「うーん、明後日には帰る」
「そうか、明後日か・・・」
「何だ？　寂しいのか？」
「アホかッ！　早く消えてほしいと思っただけだ！」
「うわっひでぇッ！　最低だよこの女ッ！」
「貴様は変態だッ！」
「うるせえッ！　ドS女ッ！」
「どういう意味だッ！」
二人の言い合いは再び火が着いた。
常の彼女ならバカやアホは無視するが、なぜか滝川に対してだけは真っ向からぶつかる。そんな自分に彼女は嫌気がさすが、滝川が再びふざけた事を言うのでまたまた怒鳴る。これの繰り返し。わかっていても、なぜか怒鳴ってしまう。不思議なものだった。
連合艦隊最古参として、常に自分や他人に厳しく生きてきた金剛にとって、滝川との怒鳴り合うその時は、なぜかそういう重圧など

全てを忘れられた。
本当の自分を、こうして我慢せずに出す事ができる。
なぜなのか。それは自分にもわからない。だが、この何気ない怒鳴り合いが、いつの間にか楽しくなっていたのは事実だ。
彼は自分の本来の姿を見てくれる。だから、こんなにも楽しいのだ。
いつまでも、こうして怒鳴り合っていたいという自分がいる。それは決して隠してはいけないものだと気づくのはもっと先の事。
今はただ、こうして彼とバカ騒ぎをしていたい。そう思っていた。

翌日、昨日あれだけ怒鳴り合った二人は親しげに話した。話したと言っても八割くらいはやっぱり怒鳴り合いだったが、それでもかなり親しい関係になった。それは彼のアホさが何よりも大きい。
滝川にはある友人がいて、妹と二人暮しをしている海軍士官候補生がいるらしい。その人物の事を話す時の滝川はすごく嬉しそうで、生き生きしていた。それが後の翔輝であるとは、今の金剛が知る由もなかった。
ただ、彼と話しているこの時間を、大切に過ごす。そう心に決めていた。もちろん表には出さず、こうして怒鳴り、殴り、呆れる。それが大切な時間だった。

その翌日、ついに滝川の帰る日が来た。
滝川はアタッシュケースを片手に夕日に照らされる『金剛』を名残惜しそうに見詰め、艦を降りようとする。結局、彼女は見送りには来てくれなかった。ちょっと寂しいが、その方が彼女らしい。そ思えた。
「じゃあな、金髪」
滝川は踵を返してラッタルを降りようとする。
「た、滝川・・・ッ！」
その、誰よりも聞きたかった声に滝川は驚きながらも嬉しそうに

振り向く。が、
「お、お前・・・ッ！？」
滝川は我が目を疑った。彼女が見送りに来てくれた事自体にも驚いたが、それよりも彼女の外見に度肝を抜かれた。
夕日に輝く金色の髪に海の蒼のような美しい碧眼をした金剛は、恥ずかしそうに視線を下げながらチラチラとこちらを見てくる。その美しい顔には――メガネ（黒ぶち）がそっと掛けられていた。
金剛の顔が真っ赤に染まって見えるのは、きっと夕日だけのせいではないだろう。驚く滝川に向かって、金剛は不機嫌そうにそっぽを向く。
「ふ、ふん。最後の別れくらい貴様の言う事を聞いてやろうと思ってな。嫌々掛けてみただけだ。他意はないぞ」
だが、金剛の声は彼には聞こえてなかった。
滝川は見とれていた。
金剛が、あまりにも美しく見えるから・・・
夕日の光を反射する細いメガネ。その奥に見える碧眼が、レンズを通しているおかげでいくらか柔らかく見え、彼女の美しさを際立たせる。
何の反応も見せない滝川に、金剛はだんだんとその沈黙が耐えられなくなって不機嫌そうに鼻を鳴らす。
「な、何だ？　に、似合わないとでも言うのか？」
金剛が不機嫌そうに――でも不安そうに聴いてくる。それに対し滝川は、
「バカヤロー。すっげぇー似合ってるよッ！」
滝川はキラキラした目で金剛を絶賛した。彼にそんな風に言われた金剛はさらに不機嫌そうな顔になるが、これは照れ隠しである。
「ふ、ふん。当たり前だ。ほらさっさと行かないと遅れる――」
その後、彼女の言葉は続かなかった。

――滝川は突如金剛に抱きついた。彼の腕の中だと一瞬わからなかったが、気づくとそれまで以上に顔を真っ赤にさせて暴れる。
「滝川・・・ッ！？　貴様・・・ッ！」
驚く金剛に滝川は叫ぶ。
「めちゃくちゃかわいいよッ！」
「か、かわいい・・・ッ！？」
生まれてこの方言われた事のない単語に金剛はフリーズする。《かっこいい》や《美しい》などは今まで散々言われてきた。だが、《かわいい》なんて言葉は初めてだった。だんだんと頭がその単語の意味を理解し、顔はさらに真っ赤になる。
「すげぇかわいいッ！　お前やっぱ才能あるよ！」
「う、うるさい！　さっさと離れろ！」
金剛は恥ずかしさのあまり爆発しそうな感情のままに滝川を突き飛ばす。突き飛ばされた滝川は何とかバランスをとって両足で甲板に立つと、そんな金剛を見て笑った。
「本当に素直じゃねぇな」
「うるさい」
顔を赤くしながら言われても説得力がない。
滝川はアタッシュケースを持ち直して艦舷のラッタルに足をかける。そして、自分の為にがんばった美しい海の女神――金剛に向かって優しげな笑みを送る。
「じゃあな。また来るよ――金剛」
「ふん。二度と来るな――滝川」
互いの名を呼び合うと、どちらからともなく笑みがこぼれた。
「今度来た時はネコミミ＋メガネ（黒ぶち）＋スクール水着＋セーラ服（上だけ）にルーズソックスをお願いな」
「さっさと行けッ！」
金剛に激しく怒鳴られ、滝川は逃げるようにして去った。
消えていく彼の背中を見て胸が締め付けられる思いを感じたが、それが何なのか、今の彼女はまだわからなかった。

海の上を走る彼の乗る内火艇に、金剛は静かに敬礼したのには一体どんな理由が含まれたいたのか、それは彼女にしかわからない事だった・・・

自分のいい所も悪い所も認めてくれる。
自分のいい所も悪い所も全部見せてくれる。
彼女が一番安心できる場所。
彼女を一番、安心させてくれる場所。
そんな場所に彼がなると彼女が理解したのは、もっとずっと先の事であった・・・

今はただ、また会える事を楽しみにし、口元に小さな笑みを浮かべる金剛であった。

（後書き）

作者「という事で今回は金剛と滝川、本編では伝説の迷コンビとなった二人の初めての出会いのお話でした」
滝川「こうやって表舞台に立てるのも久しぶりだな」
金剛「ふん。貴様は相変わらずだな」
作者「艦魂作品の元祖変態キャラだからねこいつ。まぁ、今じゃ伊東先生の大和の方が圧倒的に危険なキャラだからな」
滝川「そうだな。無理やり着せるのはダメだ。心の内から放たれるかわいさを感じる為には説得に説得を重ねて恥ずかしそうに着てもらうに限る。あいつらはまだまだ」
作者「でもお前大和（伊）と零戦先生の翡翠とこの前大暴れしたそうじゃないか」
滝川「ば、バカッ！　それは秘密――」
金剛「き、貴様ッ！　他の先生の所に迷惑を掛けたのかッ！？」
滝川「ち、違うんだ金髪聞いてくれ！　あれは向こうの大和が誘ってきたんだよ！」
作者「無理やり着せるのはダメなんじゃないの？」
滝川「いや、無理やり着てもかわいい事は変わらないからな。大々的に賛成だ」
金剛「き、貴様という奴はッ！」
作者「落ち着け金剛。そいつを殺すのは後だとして、今はとりあえず皆さんが見てるんだから礼儀正しくね」
金剛「そ、そうだな。連合艦隊最古参の艦魂としての威厳が崩れてしまう」
滝川「元々ないだろ？　ツンデレ金髪」
金剛「私がいつデレたッ！？」
滝川「みんな知ってるぜ？　特に本編最期の一緒に天国に行くシーンでは愛してるなんて言ってくれたし」

金剛「・・・ッ！？」
作者「お、落ち着け金剛ッ！　滝川のそれはルール違反だろッ！？」
滝川「そうか？　いやぁ、あの時の金髪はかわいかったなぁ」
金剛「か、かわいかっただと・・・ッ！？」
滝川「おうよ。あの時ほどお前にときめいた事はなかったぜ」
金剛「そ、そうか・・・」
作者「うぉいッ！　何だよ金剛ッ！　何で満更でもないような顔してんだよッ！　ここは怒る所だろぉッ！？」
金剛「そ、そうだったッ！　滝川貴様――」
滝川「愛してるぜ金剛」
金剛「・・・ッ！？　あ、いや、その、わ、私も貴様の事は嫌いではないぞ、だ、だがここではちょっと・・・」
滝川「気にすんなって。奴らに俺達のラブラブぶりを見せ付けてやれ」
金剛「た、滝川・・・」
滝川「金髪・・・」
作者「ちょっと待てッ！　それはまずいッ！　金剛としてのキャラが崩壊しかね――ぐふぁッ！？」
金剛「黙っていろ愚か者」
作者「・・・こ、金剛テメェ・・・ついに滝川に落とされたのか・・・がくっ」
金剛「ふん。これで邪魔者はいなくなったな」
滝川「おうよ。じゃあ金髪・・・」
金剛「うむ。頼む・・・」

近づくお互いの唇。そして・・・

？？「待ちやがれクソヤローッ！」

滝川「ッ！？」

突如として??の跳び蹴りが滝川を狙う。だが、滝川は紙一重でその一撃を回避した。

金剛「な、何事だッ!?」

??「姉貴ッ!　大丈夫かッ!?」

金剛「は、榛名ッ!?」

榛名「危なかったぜ。姉貴がこのアホに汚されるところだった」

滝川「ひどい言われようだな、おい」

榛名「テメェッ!　姉貴に近づくんじゃねぇッ!」

金剛「いや、榛名。別に私は――」

榛名「姉貴はテメェなんかには渡さねぇッ!　勝負だゴラぁッ!」

滝川「あぁん?　俺とやるってのか?　いいぜ。やってやらぁ」

刀を抜いて睨み合う榛名と滝川。そしておろおろとする金剛。

そして、どちらも同時に地面を蹴って突撃し――

ズドオオォォォンッ!

榛名「ぐわぁッ!」

滝川「うぐわぁッ!」

金剛「な、何だッ!?」

??「もう、仕方ないわね」

??「姉さんッ!?　何してるのッ!?」

金剛「ひ、比叡ッ!?　それに霧島もッ!?」

比叡「もう、何やってるのよ姉さん」

金剛「それはこっちのセリフだッ!　その肩に持っているのは何だ

ッ！？」
比叡「え？　Ｍ２０スーパー・バズーカだけど」
金剛「なぜ貴様がそんな物を持っているのだッ！？」
比叡「気にしない気にしない」
金剛「それが妹と変態を吹き飛ばした奴の言うセリフかッ！？」
霧島「はわわわッ！」
比叡「そんな事より滝川君。君に会わせたい子がいるんだけど」
滝川「は？　誰だよ？」
比叡「みんないいわよーッ！」

？？「滝川さんッ！」
？？「何してんだ滝川ッ！」
？？「滝川！　信じてたのにッ！」
？？「滝川さん！　私を騙してたんですかッ！？」
？？「どういう事ですか滝川さんッ！？」
？？「滝川さんッ！」
？？「滝川様ッ！」

滝川「ぬおッ！？　お、お前ら何でこんな所に・・・ッ！」
金剛「こ、これは一体・・・」
比叡「滝川君に誑（たぶら）かされた女の子達だけど？」
金剛「な、何だとッ！？」
滝川「うぉいッ！　誤解だよッ！　俺は別にそんなやましい気持ちは――」
？？「ひ、ひどいですッ！　私はあなたの為にメイド服を着たんですよッ！？」
滝川「ぐはぁッ！」
金剛「滝川貴様ぁッ！」
？？「私なんかブルマと体操着ですよッ！？」
？？「私はバニーだったぞッ！　あんな恥ずかしい格好までしたと

いうのに・・・ッ！」
??「滝川様ッ！　私にプレゼントされたスク水は愛の証ではなかったのですかッ！?」
霧島「み、みんな怖い・・・」
比叡「みんな必死ねぇ」
榛名「な、何なんだこれ?」
??「ネコ耳までしたのにぃッ！」
??「私はウサ耳よッ！?」
金剛「滝川ぁッ！　どういう事かきっちり説明してもらうぞぉッ！　あと他の先生に迷惑を掛けた事もだッ！」
滝川「ひぃぃッ！　お、お助けぇッ！」
金剛「ならんッ！　覚悟せよッ！」
??『滝川さんッ！』
??『滝川ぁッ！』
??「滝川様ぁッ！」
滝川「ギャアアアアァァァァッ！」

比叡「ふふふ、やっぱり姉さんはこうでないとね」
榛名「姉さん。あんたが一番怖いぞ」
比叡「そうかしら?」
霧島「はわわわッ！　はわわわッ！」
作者「・・・気絶から復活してみれば、何だこの状況?　何で滝川が金剛や駆逐艦の子になぶり殺しにされてるんだ?」
比叡「天罰よ天罰♪」
作者「はぁ?」
霧島「あ、作者さん！」
作者「うん?」
霧島「あ、あの、お誕生日おめでとうございますッ！」
作者「え?　あ、ありがとう」
比叡「そっかぁ、今日は作者君の誕生日だっけ?」

作者「覚えててくれたんだ――あ、だから感想評価を書く時に作者登録と年齢が違うってエラーが出たのか」
榛名「今年でテメェも１８か」
作者「そうだねぇ。来年は大学生だよ」
榛名「ま、卒業できたらの話だけどな」
作者「うっ・・・」
滝川「あ、って事はお前もエロゲーができる年にな――ぐおぉわああぁぁぁぁッ！？」
金剛「貴様はこっちだぁッ！」
作者「うわぁ、すごいなあれ」
比叡「ま、とにかくお誕生日おめでとう。大和達が誕生日パーティを用意してるわよ」
作者「あ、ありがとうございますッ！」
比叡「じゃあ・・・」
作者「・・・あ、あの比叡さん？　何で三五・六センチ砲が僕を向いているのか説明してくれませんか？」
比叡「祝砲よ」
作者「いやいやいやいやいやッ！　実弾を込められたら祝砲もくそもないってッ！」
比叡「気にしない気にしない」
作者「ちょっと待――」
比叡「どっかーんッ！」

ズドオオオォォォンッ！

榛名「うわぁ、作者が天高くに飛んでった・・・」
霧島「はうあうッ！」
比叡「ふふふ」
榛名「あ、ある意味一番比叡姉さんが怖いんじゃないか？　俺達姉妹の中で」

霧島「きっと、本編でも出番が少なかったから怒ってるんだよ」
比叡「ふふふふふ・・・」
榛名・霧島「ひいいいいぃぃッ！」

金剛「死ね滝川あああああぁぁぁぁぁッ！」
滝川「ぎゃあああああぁぁぁぁぁぁッ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5429f/

艦魂年代史外伝 ～鬼の金剛と軍楽青年 破天荒なその出会い～

2010年10月8日15時56分発行